

第I部

「途上国教育研究の再構築：地域研究と開発研究の複合的アプローチ」

座談会

日 時： 2014 年 1 月 4 日 (土) 15 時～17 時

場 所： 東京海洋大学 東京海洋大学越中島キャンパス 1 号館 2 階会議室

参加者： 杉村美紀、服部美奈、森下稔、山田肖子、山内乾史 (50 音順、敬称略)

「途上国教育研究の再構築:地域研究と開発研究の複合的アプローチ」座談会

山田: 今日は正月早々の声掛けにも関わらず、時間を取って頂いて本当にありがとうございます。

今回、この座談会を企画したのは、2009年4月から2013年3月まで実施していた「途上国教育研究の再構築:地域研究と開発研究の複合的アプローチ」という科研プロジェクトの総括という意味あいがあります。この科研の議論が発展して、2013年3月に『比較教育学の地平を拓く:多様な学問観と知の共働(東信堂)』という本の出版に至ったわけですが、今回は、その母体となった科研メンバーの森下さん、服部さん、それに本の執筆者の杉村さん、山内さんにご参加いただいて、本でやりかけた議論を続けてみようかと考えたわけです。

この本は、比較教育の実践やアプローチ、「比較とは何か」という点についての考えも多様だということ、ある意味、見える形で示したのではないかと考えています。ただ、「多様だ」ということが、「学」としての比較教育に、何か建設的、積極的な意味を持つのか、それともバラバラの実践の集合体にすぎないのか?それぞれの研究者が、影響を与え合ったり、何かまとまった実践や学問の中核の形成といったものに向かっていくのか?といった疑問に対しては、この本を刊行した時点では、まだ模索している途中で、オープンエンドになっていると思うんですね。そこで、もちろん、この小さい座談会で大きな結論を出すつもりはないのですが、それぞれの方の立ち位置から「学」としての比較教育、自分のスタンスと他者のスタンスの接点など、たぶん日常的に考えておられると思うので、それをざっくばらんに話し合ってみたら発想が膨らむんじゃないか、という軽いノリでやってみたいと思います。そうやって、面白い感じのインターアクションが次の発想に繋がって行ったらいいかなと思っています。

まず、どんな切り口からでも構いませんので、ご自身が比較教育学における「比較」をどう捉えているかというようなことから、それぞれご発言頂けたらと思うんですけども。

＜方法論としての「比較」、どのように比較教育学を学んだか＞

杉村: この本には、「教育学における比較教育学の位置づけ」という題をいただき、書かせていただきました。私自身は、大学院時代から比較教育学の研究室に籍を置いて、どちらかというと地域研究に近い形で方法論を学んできましたし、またフィールドに行ってみるものを解釈するというアプローチをずっと取ってきたので、やはり「比較」はどうしてもフィールドと切り離せないという考えが自分の中にあります。それで、この本を書くときも、フィールド解明のための「方法としての比較」と位置づけました。比較というのは一つの方法論だと考えます。教育学の中にはいろいろな分野があり、それぞれの分野で比較研究が行われているわけですが、比較教育学は、そうした各分野と同列に並ぶと言うよりは、別次元に位置づけられるものではないかと思っています。それぞれの領域の中で比較研究が行われる際に、より有意義な比較の方法を提示、あるいは提案していくことが、比較教育学の役割ではないかと考えます。

山田: 今、重要なキーワード、「方法論としての比較」や「フィールド」が出ましたので、後でまた取り上げたいと思います。

山内： 私は大阪大学人間科学部で学士課程から博士課程後期までずっとおりましたので、他の旧帝大とは違って比較教育学の講座がありませんでした。「比較」をしておられる先生はたくさんおられ、いろいろ教わりましたが、比較教育学という学問を体系的に学ぶ機会は今日に至るまで全くありませんでした。その一方で、私が関わっている高等教育研究は、比較というものを非常に強く意識している学問分野で、(比較教育学の先達のお一人である)馬越徹先生はその代表格の方でいらっしゃる訳です。ただ、単に比較することと、学問としての比較教育学では、「比較」という言葉に込められている意味が随分違うのだろうなというのは、感覚的にはわかりますが、私の頭の中では言葉でうまく整理することができません。最初の職場だった広島大学大学教育研究センターでは、亡くなられた江渕一公先生や、当時広島大学に在籍されていた金子元久先生、大塚豊・現日本比較教育学会長にも、いろいろと教えて頂きましたが、比較教育学概論の授業を取って理論から学んで来られたプロパーの方と比べると、やはり「比較教育学とは何か」ということに関する私の理解は浅いかもかもしれません。今日ここに来るのも実は少し躊躇しました。よろしくお願い致します。

山田： こちらこそよろしくお願い致します。じゃあ服部先生。

服部： 私は、出身が名古屋大学の馬越研究室で、杉村先生と同じように、考えてみれば学部の時から、「比較教育とは何か」という議論を、ゼミで取り挙げていたように思います。当時から、馬越先生はそこにとても深い思いを込めていたと思うのですが、学部生の私はなぜそのような議論が必要なのか十分に理解していませんでした。ただ一つ理解できたのは、「やはりフィールドが大事だ」という結論の部分でした。今振り返ってみれば、もう少し馬越先生の思いを考えなければならなかったと反省するのですが、馬越先生が学生に一番伝えなかったのは、とにかくフィールドに入ることの大切さと、その地域を深く理解しようとする努力を惜しむな、ということだったのではないかと思います。ただ、その次にどうするか、つまりフィールドに入り、地域を深く理解した後何をするべきか、という問題についての答えは保留になっていたように思います。

先ほど杉村先生が言われた「方法論としての比較」のことですが、他分野、他領域でも「比較」はするのですが、でも比較を正面に掲げる「学」として、比較教育学をどう成り立たせるかという点について言えば、この分野の研究者が集まるからこそ、何か面白いことができるのではないかという思いはあります。それが具体的にどのようなものかというのは、まだぼんやりしているのですが。

山田： じゃあ、森下さん。科研では、私のイコールパートナーでやってくださった素晴らしいメンバーだったんですが、どうでしょうか？比較とは？

森下： 自分自身は(比較教育学講座の歴史が最も古い)九大の出身なので、自分は新人なのに、新人の時から古さを求められるっていうジレンマがありました。あなたは伝統的なんですよみたいな。むしろ、若いときは今より遥かに尖った人間だったので、挑戦し続けてきたつもりではいたんですけど。最近、この科研でも、非常に多様な人たちが、多様な関心を持って比較教育学の実践に参加してきている状況に出会うと、あえてやはり伝統的らしいものを体現しようと、「実はこういう風に我々は考えてきたんだ」というメッセージを発信しないといけないと思うようになりました。(この科研にどっぷり関わったのも)役割を認識するからこそ、片足だけ突っ込むという訳にはいかないだろうと思っていたというのがあります。それで、「九大で何を学んだか」と訊かれると、実は、最近自分が発信しているものは九大で培ったものとは違っていたということにこの本の作業を通じて気づきました。この本の9章は鴨川さん、服部さんと一緒に担当したのですが、その中で「比較」は、各地域のスペシャリストになった

人たちが大勢集まって、知見を持ち寄った時に比較教育学になるのではないかと書きました。比較の方法論として議論はされてはいなくとも、実態としては各国のスペシャリストが集まって会話をすることで比較が成り立つと、そういうことを書いたんです。じゃあその時の「比較」とは何かという時に、私が引用したのは馬越先生の『越境のレッスン』ですよ。『越境のレッスン』に書かれていることが本当に自分の言葉として、例えば授業で学生に話せるようになったのはつい最近の話です。たぶん院生の頃なんて全然身に付いていなかったと思いますね。つまり、どうすれば比較になるかという、最初に一つの国や地域の研究者として、幼稚園から大学まで語れるようなスペシャリストになることから始めるべきだと思います。その時に、この本に出てきたような、理論から迫るのかとか、定量的にやるのかとか、アンケート使うのか使わないのかとか、そういった、具体的にフィールドで何をするのか、どういう臨み方をするのか、どういう切り口にするか、どういうテーマを立てるかっていうのは、九大では自由だったような気がします。もともと九大には比較教育文化研究施設というのがあって、半分は文化人類学の学生だったので、文化人類学的でも、社会学的でも、経済学的でも良いっていうのはあったと思います。

山田：（日本の）比較教育学って割とそうなんですか？ディシプリンへのこだわりより、フィールドに入り込むためには、手法は自由っていうカルチャーはあるんですかね？名大はもう少し人類学に近いですかね？

服部： 人類学というよりも…でも、人類学に近いのかもしれない。とにかくフィールドに入っていくことが重要で、数量的なデータの操作というのは、あまり好まれなかったように私自身は感じています。

山田： じゃあそこはやはり九大の独自のカルチャーだった訳ですね。

森下： 九大では、現地に入るという調査アプローチは文化人類学の人たちの方が最初に持っていて、1960年代の韓国の調査も、70年代の東南アジアの調査も、歴史を見てみると、文化人類学の人はず先に入って、教育学者が嫌々連れて行かれて…という感じですね。「とにかく3か月そこにいるんだ」とか言われて。権藤與志夫先生から聞いたことがあります。もともと九大はそういう感じで、外国に行くこと、とくにアジア諸国に関しては、教育学者は最初積極的で無かったのに、巻き込まれて連れて行かれたというように聞いていました。そういう意味では、比較教育学講座が制度的にどう位置付けていたかという、大学独自のカラーはあったかもしれませんが、自分自身の中で、「比較」をどう捉えるかという考え方には、「九大だから」という要素はそう多くないように思います。振り返ってみると、我々が最初に学部のとときに勉強したのは、沖原豊先生の『比較教育学』（有信堂）ですね。あれが一番に勉強した本で、骨になっていると思いますね。

杉村： そこでは、海外のさまざまな比較教育学者の理論が翻訳されて紹介されていますね。それらを一通り皆読んでいましたね。今、森下さんがおっしゃったとおり、九大に限らず、私の学んだ東大でも、そこから先、具体的にどうやって「比較」を行うのかという議論は、直接習った覚えはありません。フィールドの大切さや、何を対象とするかということは議論していたのですが、「対象をどう並列して比較するか」という具体的な比較方法の観点は、ほとんど議論することがなかったように思います。

山田： つまり、日本の3つの異なる大学の比較教育学の研究室で学ばれた森下さん、杉村さん、服部さんの経験からすると、教科書で学ぶことと、比較教育学を実践するということが、必ずしも繋がっていなかったという感じですか？教科書は、欧米の理論とかを翻訳したものを

読んでいて、でも実践について、先生の後ろ姿を見ながら学んでいるのは、「とにかくフィールドに出なさい、フィールドにより近接しなさい」ということだったと。それは二つの異なる路線を並行して進んだ感じでしょうか？

服部： 理論的なもの、名著や古典といわれるものは一通り把握すべきという雰囲気はあったように思います。ただ、それはそれとして読むけれど、それが実際に現場に入る時に使えるかという、やっぱりうまく使えないというか…。つまり、一通り学会での議論や理論を検討することと、自分のフィールドを極めることが同時並行していて、それが交差するというよりも、両方が自分のなかで並行していたという感覚を私は持っています。

森下： 教育学部の中にいると、比較教育学の研究室の人間として、例えば卒業論文や修士論文を書くわけです。口頭試問の時には、比較教育ではない分野の試験官から「本当に比較教育学の論文なのか」と責められるんですよ。一つの国とか一つの地域しかやってないのに、なぜ君はそれで自分が比較教育学と言えるのかと。そこをどうやってディフェンスするか。自分がなぜ比較教育学であって、このテーマを選んだのか。そういうところが一番のポイントでしたね。

山田： でも、自分の指導教員には「比較の前にまずその社会を知れ」と言われるから、明示的に比較することは要求されてなかったわけですよ？ でも外の人から比較を説明しろと言われてたということですか？

森下： 言われるんです。学部内のポリティクスもあるので。

山田： そういう時どう説明される訳ですか？ 学生として、何とかディフェンドしなきゃいけないという場面で。

森下： その時には、僕の時には既に刊行されていた馬越先生の論文 を援用して、「日本人で、日本の教育を経験した自分が、外国の研究をすることで、すでに比較の作業を行っている」という説明が一つと、「この論文の中では完結しないけれども、いずれこれが比較研究の土台になる」という二つのロジックですね。いずれいづれって先延ばしして、今でも先延ばししている感じがしますが。

<理論化と地域理解の関係>

山田： もう一つ論点を挙げます。私自身はアメリカの大学で育ったので、私自身が比較教育を自分の中で捉えようとするときに、欧米とは言わないですけど、アメリカ的比較教育と、日本で今、比較教育として語られているものを暗黙の内に比較することになる訳なんです。皆さんが今いろいろ挙げられた点をもう一步展開していくと、ある部分を切り取って説明しようとするか、包括的に見ようとするかっていうところがすごく大きく違うかなと思うんですよ。

例えば山内先生のご専門の高等教育なんていうのは、ある意味、社会というより高等教育をばっと横に比べるって言う意味で欧米的というか、仮説検証的だと思うんですね。で、この間の世界比較教育学会で、私がこの科研の延長で、日本の比較教育の学問論についての発表をした時に、アーウィン・エプスタイン教授っていう、アメリカの比較教育の学問論でいろいろ論文を書いてらっしゃる方が、「理論化のない比較なんか無い」と断言されるわけです。理論化する前に、まずその社会に身を置くという、そういう比較教育学観が日本にはあるということが、全くびっくりみたいな感じだったんですよ。そこは非常に根本的な点で、

ある意味私自身も、自分の中で二つの学問空間の違いを消化しようとした時に、要求されるものの食い違いはそこなんです。理論化できないものを観察するのは良いけれど、最終的には理論化してフレームワークをつけなきゃいけないから、フレームワークをある程度イメージして現場に行くと。そういう感覚で比較の手法や枠組みを考えるのと、「まず行く」「まず社会を理解する」「そこから組み上げる」という発想っていうのが、かなり大きく違うと思うんですけども。この点で、何かご意見がおありの方いらっしゃいますか？

杉村： それは日本と海外の比較教育学会の大きな違いだと思います。簡単にまとめてよいか分かりませんが、研究方法として、仮説生成型と仮説検証型という話がありますよね。つまり、フィールドから見たものから問いを立てていく仮説生成型の研究はどちらかというと日本的で、一方、仮説検証型の方は、あらかじめ仮説を立てておいて、それに沿って理論のフレームワークを作り、証拠を集めていくような形ですね。

山田： たぶんタイムスパンの取り方の違いもあると思うんです。例えば、西洋でも人類学はある訳ですよ。その教育人類学的手法を取るっていう比較教育学っていうものもあって。だけどそういう人たちの発表する論文でも、やはり記述より先に理論を見せないと。理論化するっていうことが論文の中で完結しないと、やっぱり論文として成り立っていないと見られるという意味では、人類学であっても、やっぱり何かその形を取ろうとする。それは1本の論文のための調査という割と短期的な時間で一つの枠組みに収めるっていう発想があると思うんです。

杉村： もうひとつは、「何のために比較するのか」という目的意識が違うこともあると思います。1990年に発表された市川昭午先生の論文（「日本比較教育学会紀要」16号、5-17頁）とそれに対する馬越徹先生の論争の発端はまさにその点だったと思います。市川先生は、社会学的な立場から、日本の教育改革に資するための比較教育研究であるべきだとはっきり書かれたのに対して、馬越先生は「やはりそれだけでは無いのではないか」と。研究のやり方のみならず、目的自体が、必ず改革に資する必要があるのかと書いておられる。何を指すかで理論化、モデル化すべきかどうかという点も違ってくるように思います。

山田： 山内先生がご専門の高等教育研究は、まさに現場が動いている状況で、研究の需要があるんだと思うんですけど、そういう意味で言うと政策志向性が強いのですか？

山内： どうですかね？ 高等教育研究者もいろいろな方がおられて、マクロなレベルで政策を考えるという方もおられますし、個々の授業場面でどううまくやるかという、非常にミクロな問題を志向する方も高等教育研究者には沢山いらっしゃいます。だから二極化している状況であると思います。

今の杉村先生のご発言に対してコメントしてよろしいですか？ 市川先生はおそらく、少し古いタイプの「教育借用」というか、そういう発想で比較教育学を考えていらっしゃると思います。今回我々が出した本の中にも出てきましたけれども、日本での学問的議論の歴史を見ると、「外国教育研究」と「比較教育学」を区別するという議論がありました。江原武一先生が20年くらい前に書かれた本でも、「自分がアメリカの教育を研究しているのは外国教育研究で、比較教育学とは違う」とおっしゃっています。日本人が外国であるアメリカの研究をすることに一定の意味があるのだということですね。つまり、比較教育学という学問分野の中に明示的な「比較」を強く意識する部分と、地域を深く知るという「地域研究」の領域とが共存しているのではないかという印象を受けました。

山田： それは同じ人の中で両方持ち合わせる？

山内： それもあり得るでしょう。だから、市川先生が意識しておられる「比較」というのは、マンパワー・プランニングとか、GNP と教育就学率の相関を調べるとか、そういった意味での多国間比較ですよ。江原先生のおっしゃるのは、ああいった、いわゆる比較手法(コンパラティブ・メソッド)を使った調査というのではない、日本人が外国人として、ある国の研究をすること、それ自体に積極的な意味を見出だそうという「比較」の発想ではないかと思います。

山田： 比較教育学会の紀要で、日本の比較教育学の手法や理論を精緻化しようという議論が度々起こった中に、もっと宗教だとか歴史だとか、そういうものを見なきゃという議論が結構ありましたよね？科学的メソッドを使うっていうよりは、やっぱりそれも包括的に社会を見るという方向での精緻化の発想が脈々と続いていると私は思ったんですが。

杉村： その通りだと思います。たとえば服部先生は宗教のことに焦点を当てた研究をしておられますが、宗教に着目することで見えてくる比較研究の面白さというものがあるように思います。

服部： 少し話がずれてしまうかもしれませんが、(この科研の活動の一環として、研究手法の異なる比較教育学研究者同士で)モルディブと一緒に調査することでさまざまな発見がありました。研究者の立場で最も違いがあらわれたのは、社会的な還元に対する考え方、つまり、モルディブの人たちに役に立つ調査をするべきか否か、モルディブ社会への還元を強く意識するかしないかという点であると思いました。おそらく山田さんがモルディブ教育省の依頼を受けて実施した調査(O レベルテストの結果に影響する要因の統計的分析)は、実際にモルディブ政府からの要請ということもあって、モルディブ政府の人たちに直接、役に立つものだったと思います。逆に私が調査したテーマ(モルディブにおけるイスラム教育)は一体どのような意味があったのかなどと考えることがあります。2013年2月に最後にモルディブ政府と共催で実施したセミナーを例にとると、私が地方で調査をした結果は、ある側面で政策決定者にとっては取り上げることが好ましくないような情報と考察を含んでいました。そういう雰囲気セミナーの場で感じました。もし、そのような政策志向ではない調査、ここでは宗教教育に関する調査に意義があるとすれば、政策決定あるいは政策立案に資する情報だけをみていると抜け落ちてしまいかねないような重要な側面、そういう側面に関する情報を地道に積み重ねて提示すること、そしてそれが今すぐに役立たなくても最終的には人々の暮らしや社会を豊かにするための基礎資料となる点にあるのではないかと思います。ただ、もちろん、直接的・短期的には政策立案に役立たないではないかといわれれば、そうですと言うしかありません。

杉村： 私も全く同感です。つまり、さっき、エプスタイン先生が、どうしても理論化があるべきだと言われたという話ですが、逆に理論化した場合、その理論で全部が説明できるかということ、そうではない部分があまりにも多すぎるように思います。フィールドに行ったことがある方だとおさらそう思うはず。理論化やモデルをつくることは、たしかに大切な作業だと思いますが、一方、それがどこの国にも万能薬のように当てはまるかということ、実はそうではないし、まさにその当てはまらない点こそが逆に多様で面白い。この本の表題にもあるとおりです。フィールドからみえたものは、すぐには役に立たないかもしれませんが、それを積み上げることが、まさに比較教育の醍醐味、面白さではないかと思います。例えば宗教一つとっても、服部先生がご専門のイスラムでも、マレーシアとインドネシアは違うし、中東も違うし、だからこそ摩擦が起きるわけです。もし一つのモデルで語れば、あっという間に紛争も解

決するでしょうけど。やはり現実、じっと見れば見るほど、何か理論だけに集約できない部分があると思います。

もう一つ、私が学んでいた東大で、始終徹底して言われていたのは、学問として持っている比較教育学の素晴らしさでもあり、同時に怖さという部分です。それは戦前の比較教育学が政策研究に利用されてしまった部分があるということです。ですから、先ほどの話で、モルディブでの調査について服部先生がおっしゃっていた現地の方に還元できるという視点は大変大事な発想だと思います。調査に行った時も、自分は学問的に面白くて調査を行うわけですが、調査を行っているフィールドで生きている人たちに、どういう意味があるのか考えることを忘れてはいけません。私は学生の時マレーシアに行った際に、ある村で、中国系の人から旧日本軍との関係を描いた資料を出されて、これをお前はどうか考えるんだと言われたことがあります。日本人が今ここに来て何を調査しようとしているのか、と問われました。その時には、すぐに回答が出せず、今なお大きな課題です。研究を進めるうえで、そうした歴史的な背景や経緯をフィールドに暮らしている人々の視点からみるということも忘れてはいけません。理論を作ること自体は、それはすごく大事なことです。その際に、背景にある細かい襞の奥の奥みみたいなところを、いかに盛り込んで考察するかということが大事だと思います。

山田： ちょっと話がそれるかもしれないんですけど、「理論」についてですが、ある種思考が固定化して、理論を当てはめるっていう風になってくると、それはもう作法であり、固定観念の当てはめにすぎなくなってくるわけです。今の時代の世界の教育の様々な現象を見たときに、枠にはめたら良くわからないことっていろいろ出てくると思うんですね。私なんかアフリカを見ると、教育学で説明つくことって少ないなと思うことがあったりする訳です。そうすると、理論化するってどういうことなのかなってその場で考えるんですよ。アフリカの教育現象を見て、習ってきた教育学で説明しようとするとうまく説明できない。でも理論化しろと言われる。理論化しないときって人は納得しない。英語でしゃべってもそれはただの報告だと言われてしまう。…というときに、理論化のためには、既存のものが無いときに、もう一度人がわかる理論を作るっていう作業が出てくると思うんですね。そのためにはやっぱり現場を知らなきゃいけない。その仮説生成型か検証型かって言った時に生成型なだけで、たぶんその、生成してくるものを、どこまで理論というものにして見せるのか。それとも、現場を叙述する方が重点なのかという力点の違いはありますが、現場発の理論化もありだと思うんですね。特に理論自体がチャレンジされるような状況だと。欧米の人たちが、理論が無いという批判をする場合に、実はそれは理論が無いんじゃないくて、既存の理論でわかりやすくないだけ、という場合もある気もするんですね。

森下： いわゆる地域研究っていうキーワードで自分のことを定義し直して、モルディブなんかでは地域研究者として振る舞おうとした、あるいは地域研究はどうあるべきかということを考え始めたこの数年の中で気づいたのは、例えば開発研究者の黒田一雄さんと議論するときなどに、先鋭化させて紡ぎ出した自分の言葉って、全部東大発じゃないかって。九大発じゃないってというのが結論なんですよ。例えば西野節男さんがおっしゃる、まずは記述をちゃんとすべきということや、あるいは馬越先生が書かれていたようなこと、市川誠さんが訥々とフィリピンの教会の話をする語りとか、皆、研究の対象を深く知る大切さを訴えている。それから、「比較」を一般化と差異化の傾向に分類した今井重孝先生の理論ですね。我々の出した本の近藤孝弘先生の章で、山内太郎先生がおっしゃった「比較するなどということとは本来はしたくないことだ」という言葉を引用されていますが、これも象徴的ですね。

杉村： そうそう。それは東大で言われていたことです。「安易に比較はしてはいけません。」と。

山田： そういう、「比較教育はなぜ比較をしないか」とかいう論文を読んだりして私が思うのは、理論化っていう言葉の意味合いが、日本で使う場合と英語で使う場合が違うんじゃないかということですよ。

杉村： おっしゃるとおり大事なポイントだと思います。根本にあるものは同じものかもしれませんがね。

山田： なんかそういう気がするんですよ。簡単に理論なりパターンに落とし込むなという話だけど、なんかこう、自分なりに捉えようとしているものっていうのは、ある訳ですよ。

杉村： 最近、同じようなことを大学院のゼミで議論していて感じたのは、日本と海外では、論文の書き方が決定的に違いますよね。海外のジャーナルは、仮説検証型に書いていかないと査読を通らないと言われます。英語に堪能な先生が、投稿先によって、自然と、自分の中で書き分けていておっしゃっていました。なんとなく日本の学術誌に投稿するときは日本流に書くし、欧米の学術誌に出すときは欧米流の書き方をしているということです。やっぱりその違いも、さっきから議論されている「似て非なる点」ということと共通していることかもしれないですね。

服部： アメリカで教えられる理論化というのは、例えば比較教育学の分野では、どのようなものをイメージしたらよいですか？

山田： 理論って別に「〇〇論」のことじゃないんですよ。だから、例えば人的資源論とか、ソフトパワー論と言えとか、そういう話では必ずしもなくて、ただ、問題設定があって、それに対してどういう説明がつくのかという、要因と因果関係を明確に示せ、といったことでしょうか。例えば、宗教教育の論文であっても、現在モルディブでこういう宗教教育の現状があると。それには歴史上、1 から 3 の要因があったと。それに対して A から C の外的な要因が〇〇と△△のルートで来た。そういう風に畳み掛けて説明がついて、「よってモルディブの宗教教育はXXである」となっていればそれは理論化なんですよ。一般的にイスラム教育というのはこういう特徴があるがモルディブのそれは、こういう独自性がある、といった風に整理することだと思うんです。それを明示的にするか、ある程度分かっている、そういう書き方をしないかというのはあると思うんですけど。

服部： 成果の示し方の違いのような気がします。人類学や社会学の分野で、たとえば佐藤郁哉さんが著書のなかでもおっしゃっていることですが、フィールドというのは、調査前にとりあえず立てた仮説を再考したり、壊しながら練り上げてゆく場だと思います。しかし、調査を終えて最終的に論文に書くときには異なった提示の仕方となります。つまり、最終的に到達した結論から仮説を立て直すといったらよいでしょうか。論文だけをみると、あたかも最初から一定の仮説をもってフィールドに臨んだようにみえるかもしれないのですが、実は書くときにひっくりかえして書いている。もしかしたら、そういった提示の仕方の問題であるような気がします。

山田： おっしゃるように、その成果の出し方のほうの違いがすごく表面に見えるから、違うっていう風に思うんですけど、「理論」という言葉自体に抵抗感を持つことはあったとしても、やろうとしていること自体のプロセスや思考回路はそんなに違わないような気がするんですよ。どうでしょうね？もちろん先ほど服部さんが言われたように、頼まれて明らかに政策に資する目的で調査をしている場合と、政策に直接貢献する意思が明確でないっていう、短期的目標設定の違いっていうのはあるでしょう。

杉村： そのように考えると、議論を、十把一絡げにすることはできないですね。例えば今の話だけでも、目的一何の為に研究するか—というところに議論のポイントがあるかと思います。今のお話の政策提言というのは、たとえばプロジェクトとして調査研究を行う場合には、一定期間の中に一定の成果を出して、求められた課題に対して一定の成果を出すことが求められますし、その時には、記述したのから各自何かを読み取ってくださいっていうのでは話にならないでしょう。でも逆に、学位論文研究などで、自分が積み上げていく研究の場合には、淡々と、有るべきものを資料として残して、それが百年後に誰かによって読み解かれるかもしれないといった場合もある。それもまた重要な研究です。その意味でも、何を目的としてそのことをやっているのかっていうことが大事な点ですね。

<比較教育学の核が生成される過程>

山田： 比較教育学としての独自の理論とか手法というものはあると思います？

杉村： それはどうでしょうか？

山田： だいたい皆さんが引用する理論って、社会学だったり、政治学だったり別のディシプリンからのものですが、一方、戦後の比較教育は、比較の理論なり、比較の手法なりを確立しようという歴史でもあったと思うんです。そういうものを目指していくっていう方向性があるのか、そういうことじゃないのか。皆さん何かありますか？

杉村： 人によって見解が分かれると思いますね。

森下： とりあえず、あるといいなと思いつけていますけど、無くてもいいかなと思います。自分が生きてる間に必要としないというか。差し迫って、比較教育学発の、発信の理論が無いと息ができないとかそういう状況ではないと。やっぱりまだまだ理解しなくちゃいけないこと、まだ解明されてないことがフィールドにはいっぱいあるような気がしています。もっとやることあるなと思ってるという感じですかね。学生のころは、論文で理論を振りかざしてみろということ盛んにやりましたが、だんだんやらなくなりましたね。

山田： トレーニングのプロセスが逆ですよ。日本の比較教育って。より理論とか振りかざさない方に訓練していくでしょう？ 普通、逆に行く人が多いですよ。欧米もそうだし。教育学の中でも、論文の構成として、入口と出口を理論でがっちり固まるということを非常に重視する論文の書き方をされる方もいると思うんです。でも比較教育学はそれを、よりしない方向に訓練されている印象がありますよね。

森下： 私の個人的体験では、理論を頭と後ろに置いているのを若い頃一生懸命書いてて、投稿したら全部落ちました。三回落ちて、四回目に理論を振りかざさないものを書いたら通った。たぶんまだ熟して無い状態の理論を使って出したからなんだと思うんですけど、理論でチャレンジした投稿は全部落ちていました。

杉村： たしかに、変にモデルを振りかざすような発表の仕方をするとか比較教育学では評価されにくいということがあったかもしれませんね。

森下： だから、私の論文が「はしたなく」見えたのでしょう。個人的な体験だけで全部普遍化できないとは思うのですけど。

山田： ちょっと紀要編集委員長をされた山内先生に聞いても良いですか？ 紀要の影響って結構あると思うんです。紀要編集委員会がどういう編集方針を持つとかか、どういう評価プロセスを経るかということが、かように研究者の育成に影響するようなんですけど…。

山内： まず編集委員長は中立と考えて、個人的には介入しません。私は、日本教育社会学会でも、日本高等教育学会でも編集委員をやったので、それぞれの違いがよくわかります。教育社会学会では、グランドセオリーへの貢献が非常に重視されますよね。教育社会学では、機能理論、葛藤理論、それからニュー・ソシオロジーとかの理論を学ぶところから教育社会学概論がスタートするという教育スタイルを取ります。それで、投稿論文でも、うまく先行研究レビューをまとめているか、その研究をどういう理論で説明しようとしているのか、調査設問が立っているか、結論がどうかとか、そういうチェック・ポイントがある訳ですよ。だけど、比較教育学は、かっちりとした基準を示していくところがあります。例えば海外に留学した経験のある先生が査読者の中に多いですから、調査設問がしっかり立っているかどうかというのは、かなり重視されるように思いますが、あとは…あまりに記述的でもダメだけれども、取ってつけたような説明もダメですね。その辺が…(編集委員の)服部先生、どうですかね？ 社会学とか心理学とか経済学のように、これとこれとこれという形で基準を明示し辛いように思います。一人一人の委員の方の見識に頼っているような印象がありますよね。

山田： 紀要編集委員のメンバー選定とかで、外から見た勝手な印象ですけど、だいぶ多様性を意識されたように思うんですけど。

山内： まず研究している地域、それから、初等、中等、高等という教育段階を配慮します。投稿された論文は、全部、外部委員を入れず、編集委員だけで読んで審査するというのが原則です。自分たちの中で全部カバーしなくてはならないので、どんなマイナーな国の研究が出てきても、読んで判断しなくてはならないということですが、現実にはカバーしきれない訳ですよ。そこは難しく辛いところですね。社会学系とか教育行政系とか、あるいは比較教育のプロパーな方とか、学問分野に対する配慮は、私が編集委員長僕の時にはしていませんでした。ただ、編集委員会では、毎回深刻な意見の相違が生じましてね。学問分野によって、ある方が良いという論文が、別の方の目には「論外」と映ることもある。教育社会学でもありますけれども、比較教育学の方が、査読者によって評価が割れるケースはずっと多いですね。高等教育学会でもそこまで割れません。比較教育学会では立ち位置によってはっきり分かりますね。それぞれトレーニングを受けてきた学問分野の影響もあるのですが、要するに、何が良い論文かという「学問観・論文観」が、漠然としているように思います。

服部： 確かに何かを詳しく記述するには枚数的に足りないし、ほどよくいろいろな要素がブレンドされて配置されたものが最終的に採択されていくような気がします。方針があるというよりは、高く評価されるものとそうではないものとの境界がハッキリしないまま、よく整った万人受けする中間のものが採択されるということなのかと思いますけど。

山内： そうですね。極端に低い評価をした委員が一人でもいらしたら、総合評価としてマイナスになっていく傾向は確かにありますね。

山田： だいたい皆がそこそこ共感して良いと思う範囲の論文というのは、質もほどほどなのか、それとも振れ幅が狭いけれども内容的には高いということなのか、どっちなのでしょう？ すごく良くもすごく悪くもないっていう意味で、クオリティーも中くらいなのか、それとも何となく比

較教育学の王道と皆が合意するところに収まっているという意味で中くらいのところなんであって、質的には良いということなのか。

山内： 要するに大きな難点がなければいい、ということだと思いますよ。競争倍率が大体いつも4～5倍にはなりますから、相当良い論文が載っているはずですが。ただその論文が、どう構成されているかとか、どういうポイントが見られるかというチェック・ポイントが、社会学とか心理学とか経済学とかのように構造化されていないように思いますね。極端な場合、「この分野、この地域はほとんど研究がないから」とか、「探索的な研究だから」といったことで掲載される場合もあり得ます。逆に研究の蓄積が多い分野だと、先行研究をきちっとレビューして、それで理論を使っていないと評価されないこともあります。フィールドによって求められる要件が異なってくると思いますね。

もう一つ述べても良いですか？学会賞(平塚賞)の選考委員もやっていますが、これも、やはり5、4、3、2、1で、五点评価ですね。で、1という評価を誰かが付けると、ダメだということになってしまいますね。付けた理由はともかくとして、5と4の評価が多い人が残って、ついで1が付いた人、極端に低い評価があった人は除外されるということになります。大きな難点がないと誰しもが認めるものが残っていくという傾向があるんでしょうね。

山田： なるほどね。誰しもが良いと、難点が無いと思う範囲というのが、暗黙のうちに学問分野の核になっていくような気がしますね。今日の座談会の最初に、結論を出す必要はないけれど、なんか比較教育学を議論した時に、どの辺が核になっていくのかというのを模索するようなことができらばって話をさせて頂きました。別に学会が主導して方向性を強引に作ろうとしているとかいうことは無いでしょうが、例えば紀要で掲載される論文の傾向が次の世代に影響したり、学会賞をもらう人の傾向がある種のメッセージになったりする可能性はあると思うんですけど、そういう、何となく比較教育学の核であろうと、皆が合意するところってというのはやっぱり地域研究的な要素が強いものでしょうか？

服部： 私は、現在、学会誌に掲載されている論文は必ずしも地域研究色が強いものばかりとは思わないですが。

山田： だいぶ変わってきましたよね？

山内： そうですね。私もそう思います。

服部： どちらかという制度研究的なものが多いのではないかと思います。

杉村： そうですね。他の教育学関係の学会と比べた時に、比較教育学会の今の特徴と言うと、制度を扱っている研究が多いですね。自分の研究をどこに投稿するか考える際、比較教育学会に投稿されるものには、やはり圧倒的に制度に関わるものが多いかもしれませんね。それからミクロ的な研究も異文化間教育学会の発表と比べると、いろいろと違いあがるように思います。

服部： 極端に地域研究的な論文でも、逆に極端に教育開発的な論文でも査読を通らないような気がします。

山田： それは結局、極端に振れていないものは制度研究の部分が重なっているってことなんですね？

服部： おそらくそうではないでしょうか。そうすると、何かそうした実態と、学会が核にしたい部分とが、若干ずれているような気がします。

山田： おもしろいですね。じゃあ学会が進みたい方向っていうのはどういう感じなんですか？

服部： もともと比較教育学は制度研究が主流であったとは思いますが、そこにおさまらない比較教育学ならではの面白さが地域研究や教育開発研究にあるのではないかと。それをいかにブレンドするかというのがおそらくこの科研のテーマだったと思うのですが、そのどちらも、学会誌の選考という観点から見ると、脇に寄りつつあるような気がしています。もしかしたら学会誌が知らず知らずのうちにそういったメッセージを送ってしまっているのかもしれない。

山田： 極端を排除した結果としてですね。

山内： 研究対象との距離の取り方は難しいですね。西野節男先生は「研究対象を愛して入り込んで」と、よくそういうことをおっしゃいます。フィールドワークも外から観察するだけじゃなくて、登場人物の一人になって、入り込んでやるのだということでしょうね。そういう研究を高く評価する方がおられる一方で、研究対象を突き放して、その国に行ったことはないけれども、データセットだけ手に入れて、それでカチャカチャと分析して、回帰分析とかロジット分析とかしてその国について論じるという人たちもおられます。そういう両極端の人たちが、お互いをちゃんと評価するのはなかなか難しいですよ。研究対象との距離の取り方については研究者それぞれで、それぞれ自分のスタイルと近いものを評価する訳ですよ。それは、一人一人の、研究者としての生きざまに関わることですが、ある種の論文が排除されて、ある種の論文が入って来るということに繋がってしまいます。

杉村： 例えば開発研究の方たちは、国際開発学会でも活躍されていますよね。

山田： すごく人数多いですよ。今。

杉村： 開発研究をしておられる方のなかには、国際開発学会で発表しようという方がおられるでしょうし、一方、フィールドに徹底した研究であれば人類学会などで発表されている方もいるような気がします。最近の議論を拝見していると、比較教育学会の存在意義、あるいは立ち位置といったものは、それぞれ異なる方法論のアプローチを上手く調和させることにより明らかになるのではないかと感じています。

比較教育学会で制度論に重点が置かれるのは、制度論こそ、比較教育学独自の分野となりうる領域ではないかと思うからです。つまり、モデル化して制度を考え、実際の状況を切り分けているだけでは見えないものがある。フィールドから何か吸い上げて組み立てるとすることも必要な研究のアプローチであり、その点へのこだわりは、開発学会でも、あるいは人類学会でもなく、比較教育学会こそという気がします。比較と名前がついてしまっているから、「なぜ比較しないのか」という議論に囚われがちですけど、こうした観点からは、比較教育学だからこそ持ち得る、その面白さが伝わればいいのではないかと感じています。

＜研究の志向性の多様化についての課題と可能性＞

山内： 志向性の分裂自体は、他の学問分野でも起こっています。教育社会学でもマクロとミクロと、定量的な研究をする人と定性的な研究する人、それから理論研究をする人と、それぞれ全然別の世界で生きていますし、それから高等教育研究でも、さっき申し上げたように、マクロな政策研究とそれからミクロな授業研究やる人などに分裂しています。どこの学会でも、その学会誌の特集で、学問的アイデンティティを模索するような特集が組まれています。会員数の増加に伴って、いろいろな要素を抱え込んでしまった結果、志向性の分裂が露わになってきていると思います。

杉村： それは、学問が発展してきたから起こっているジレンマとも言えますね。皆が何となく外国の情報や話を聞いて面白いと言っていた時代は、それはそれで良かった訳ですものね。

山内： 天野郁夫先生が良くおっしゃっていたのは、「学会というのは 30 年が寿命だ」ということでした。30 年経って一世代経ったら、いろいろな要素が入ってきて、発展した学会は分裂するのだということですね。なんか実感できます。

山田： この本が刊行された時に、いろんな方が、うちの学会でもこういうのが必要、という反応を下されたんです。だから、今、山内さんがおっしゃったようにどの学会でも、分裂、分離っていうのってというのは感じられていると思うんです。で、一つ思うのは、この本のイントロのところを書いたんですが、学際、インターディシプリナリーって言っているのと、本当に交わっちゃって一つのディシプリンになっちゃうものとの違いってあると思うんですよね。インターディシプリナリーって言うのはやはり、皆、軸足をどこか別のところに置いて、出稽古に来ている感覚があって、自分の母体のディシプリンを背負っているところがあると思うんです。それはそれで一つの在り方だと思うんだけど、やっぱりインターディシプリナリーが、マルチディシプリナリーというか、新しいディシプリンになるには、そこに一つのアイデンティティができるかどうかの違いだと思うんですよね。比較教育学のアイデンティティがあるのか、それとも別々のものがたまたま集合しているのかっていう違いがあるんだと思うんですけどね。

山内： 以前、私の編集した本を、日本女子大学の尾形文哉先生という、タイの研究をされている方が書評して下さった時に、「比較社会学」という言葉が最近良く使われると書かれました。「比較社会学」という言葉を使っている人は皆、比較教育学者ですね。私以外にも、乾美紀さんや杉本均さんとかがそうです。「比較社会学とは何か」というと、トータルな社会構造の文脈において教育制度なり教育政策なりを理解しようということであって、比較教育学の目指しているものと一緒だと思いますけれども、そういう時に「比較教育学」という言葉を使わないで「比較社会学」という言葉を使う人が結構、私も含めていますね。

服部： 教育社会学ではなくて、教育をとって比較社会学ですか？

山内： そうなんです。「教育の比較社会学」ということでしょうか。ただ、「比較社会学」という分野が確立しているのかというと、そうでもなくて、比較教育学と同じように、独自の学問的ディシプリンや理論があるということではありません。ただ、何となく比較社会学という言葉の方を、教育社会学のトレーニングを受けてきた人たちは使う傾向がありますよね。

山田： その方がしっくり、自分も納得がいくわけですね？

山内： 社会学のトレーニングを受けた人間にはそっちの方がしっくりくるのかなと思います。

山田： 比較教育学も、社会から切り離しては教育を語れないというスタンスだと思いますが、他方、「比較教育学」と称することによって、教育だけ切り取って説明する部分もありますよね？そうすると、ある種、定義矛盾というか。社会全体を比較してる中に、たまたま多少ウエイトは教育に置いてますっていう方がしっくりくるっていう、そういうニュアンスなのかなと思いました。

服部さんは、人類学と比較教育学ですよね？アイデンティティとしては。

服部： 人類学は…これは難しいところで、名大の比較国際教育学講座は大学院重点化の際に比較教育学領域と教育人類学領域に分かれたという経緯があります。私自身は、フィールドを重視するという観点から、教育人類学という領域を担当することにそれほど違和感はないのですが、他方、教育人類学というと、また一つの独立した学問分野になってくるとい難しさがあります。そうした教育人類学という学問分野と、比較教育学との関係をどのように整理すべきかについて、まだ自分の中では答えが出ていません。教育人類学としての「学」の確立という観点からみると、箕浦康子先生や江淵一公先生といった先生方が尽力されてきた流れもありますし、一方で人類学的なアプローチを重視する比較教育学という流れもありますので、それはそれで大変難しい問題です。

山内： 教育社会学の場合、「アンチ教育学」という性格が、特に東大などの場合強かったので、さつき杉村先生がおっしゃったような戦前の政策研究に対する反省とは別に、政策志向が非常に強い研究を東大の先生方はされてきた訳ですよ。清水義弘先生でも天野郁夫先生でも、それから金子元久先生でも、皆審議会とかに入られて、しかも中心的なメンバーになって、政策研究をしておられました。教育学と社会学との融合したものが教育社会学なのですけども、個人的には、どちらかという社会学の色彩が強いと感じますね。先ほど申し上げた教育社会学の理論はほぼすべて社会学の理論でもあり、方法論も社会学とほぼ同じです。そういう教育社会学者が比較教育学会にたくさん参加しています。

杉村： 日本の比較教育学がどうしても制度論や政策研究に重点をおきがちなの要因もそこにあるのでしょうか。

他方、教育学である以上は、もっとミクロな部分や実践に根差した部分が、本当はあっても良いのかもしれないですね。比較教育学会では、必ずしも制度や政策だけではなく、そうしたミクロな部分にも関心が集まるのは、歴史的な背景を重視した研究や、そうした研究に関わってこられた方たちの傾向も大きく作用していると考えます。

今年ちょうど比較教育学会 50 周年を迎えますけど、これは一つの大きな転機になるのかもしれないと考えています。少し議論の方向を変えてしまうかもしれませんが、これまでの比較教育学は、基本的にすべて、近代国民国家の枠組みに基づいて研究がなされてきました。しかしながら、これからの大きな研究課題は、既存の近代国民国家の枠組みだけでは説明できない現象が起きた時に、そこでの教育事象をどのように分析していくかということだと思います。もっともこれは、比較教育学だけでなく、教育社会学を含む他の学問分野でも直面している問題だと思います。この話もまた、先ほど話題になった、研究アプローチをブレンドする時の、一つの面白い視点にはなるのではないのでしょうか。

山田： それは重要なご指摘ですね。

杉村：そして、その意味では、鴨川明子さん、日下部達哉さん、森下稔さんが提唱された「三点比較」という研究方法論はとても興味深いものと感じています。「三点比較」とは、これは従来、並列されたもの二つだけで比較してきた伝統的な方法に対し、三点で見るという発想です。もっとも、「三点比較」を取り入れる場合には、何を分析するか、という問いも重要だと思います。今申し上げた通り、国民国家の枠に収まらない現象を分析する道具が必要になってくるかもしれませんね。

山田： そのご指摘、私は重要かつ面白いと思うのは、90年代に馬越先生を中心に、比較教育学の転機だということで、何度か紀要の特集を組まれたり、本を書かれたりした中に、国民国家の単位で物事を測れない時代に、比較教育が何をすることを考えなければいけないという議論を提起されてるんですよ。それからもう十何年経つ訳ですよ？そこで我々がまた、グローバル化の時代、国民国家の単位と違う手法、発想を持たなきゃと言ってるってことですよ（笑）。

杉村： この点は、他の学問分野ではちょっと難しいのではないかと考えます。比較教育学は、まさにそうした新しい視点の研究が提案できる領域だと思いますし、そうした研究を担うべき学問なのではないかと思えます。

山田： じゃあ学会の研究プロジェクトとしてやってください！

杉村： 私が今、関心をもっているアジアの地域連携に関して言うと、そこには、これまでとは全く違った、教育行政のあり方や、空間が誕生しています。以前は、国民国家ではなく、そうした地域共同体をどのように分析するかという議論はありませんでした。もちろん、比較教育学以外の分野でも取り組まれる観点だと思いますが、比較教育学はその点を特に前向きに打ち出してよいのではないかと思います。ただそうなると、エプスタイン先生に酷評されたという理論化のなさが引き続き全面にできてしまいますが…。

山田： いえ、エプスタインさん、「今後の展開に期待してる」っておっしゃってました。

杉村： そうですか。それはとてもうれしいですね。

山田： ぜひチャレンジしてやりましょうよ（笑）。

杉村： その場合には、欧米の研究者が描くことができなかつたもので、私たちが培ってきた部分、すなわち社会や文化を総合的にとらえる視点を大切にしたいですね。その点には、今日のトランスナショナルな状況を見ていく上で大事なヒントが沢山あるように思います。宗教というのはまさにその典型ですよ。宗教が繋ぐ新しいフィールドはたくさんありますね。また言語文化もそうだと思います。で、それもやはり比較教育学が簡単にモデル化できないとこだわり続けてきた何か、描き出すものではないかと思えます。

山内： その意味で、この比較教育学会という名称が、比較国際教育学会とか、「国際」という文字を入れた方がいいかもしれないといった議論になってきたということではないのでしょうか？

山田： 「国際」を入れることによって学会のアイデンティティにどれくらいのインパクトがありますか？

森下： 比較教育と国際教育は異なるものだという考えに立つと、「比較」と「国際」の間に中黒(・)を入れるという議論になるんだと思います。石附実先生が盛んにおっしゃっていたのは、「国際教育という現象はあっても、国際教育学という学は無い。」ということです。比較国際教育学という本を出されながら、国際教育学は無いという。最近、注目すべき現象や研究課題だからと言って、安易にタイトルに入れていると、だんだん今度はジェンダーも入れなきゃ、といった感じで際限がなくなる。だから2012年に刊行した「比較教育学事典」のタイトルの議論があったときも、一つ入れ始めたらきりがなく、また、学会編だからということで、学会名に合った事典の名前にするという判断がありました。

今まで、比較教育の間口を広くして、いろんな人に入ってきてもらってきたということが良かったと思います。そういった中であって、分裂してしまわないように、今回の科研みたいに、地域研究者と開発研究者が一緒になって対話しましょうとか、一つのフィールドにいろんな人が入ってるのだから、その人たちの中での議論ができるようにしましょう、という活動ができているとすれば、それはまだ成功モデルの方だと思うんですね。危機に瀕してるというよりはむしろ。そういう意味で言うと、タイトルに「国際」が付いていないのかもしれない。

山田： それによって排除される人も出るかもしれないですね。

杉村： 玉虫色だけど、その中で上手くブレンドが進んでいるという、ハイブリット的な感じでしょうか。

山田： 比較教育学って、一方では間口が広いんだけど、他方、比較教育学の王道の大学の研究室に入って次世代まで比較教育学を背負うっていう人材の育成に関しては別次元の再生産が進んでいて、非常に特化してる気がするんです。二段階あるような気がするんですね。実務家であっても、学者じゃなくても、必ずしも比較教育の訓練を受けて無くても入れるっていう意味で、学会自体の裾野はどんどん広がるんだけど、じゃあ、比較教育学講座の教員になるとか、講座じゃなくても授業としてそういうことを教えるとか、研究者としてそれを継承していくっていう人たちに対するメッセージというのは、もう少し特化したもので、それがやっぱり、学会誌の選考のある種の傾向に現れたり、学会賞で選ばれる人たちの傾向としてメッセージになってるような気はするんですね。どっちが良いとか悪いとかじゃないんですけど。なんかこう、比較教育学って言うのは何なんだろうって論じる時に、その二段階がいつもあるような気がするんですね。

杉村： 以前の学会の大会で、比較教育学の授業が全国でどんな風に教えられているかというテーマで、課題研究が行われたことがありましたよね。その時に、比較教育学そのものを講座名に掲げている授業はそんなに多い訳ではなく、ましてや比較教育学という授業が開講されている大学も、実はあんまり多くないという話がありました。今ちょうど山田先生がおっしゃったように、確かに比較教育学分野の人材養成の仕方は現実の学会の目指す方向とは違うのかもしれませんが、そもそも、それ以前に、そういう講座自体が無かったり、学問分野としても、科目名として比較教育学っていうのがある大学が多い訳ではないというのも、この分野の特異性ですよね。殆どの方は、実際には教育社会学とか、教育行政とか、そういうところから比較教育学会に会員として入ってこられる訳ですよね。

山内： 教員免許の課程の関係もあるのでしょうか。比較教育学は必須ではないですからね。多くの大学では社会科学系の教育論としては、教育社会学か教育行政学のいずれかを取ることになっているのではないですかね？

森下： 社会的、制度的、経営的事項という区分があつて、そこに比較教育制度論という科目名が例示されてはいるんですよね。でも、その一科目で社会的なもの、経営的なものを含めるってシラバスに書かないと文部科学省の審査を通らないんですよ。だから、教職課程の授業で、自分の専門がこれだからって、比較教育なら比較教育という科目を立てて、気ままな授業内容を作ったのでは、その教員もシラバスも認定されない。そういうことになってくると、比較教育というの、教職課程に今から益々置き辛いんですよね。教育制度論とか、別の名前にしておいて、一部の内容に比較教育学的な要素を入れるぐらいですね。そうすると、これから先の若い人たちに、こういう分野こそが自分の分野だと思う人たちがどれだけ入ってきてくれるかというのはちょっと不安なところですよ。

山田： そうですね。インスティテューショナルなものも大事ですよ。そういう講座があるだとか、教養科目や教職課程にその科目が入ってるとか。

<比較教育学の今後の展望>

山田： だいぶ長くなりましたから、最後に、一度話題が出ましたが、学会としては 50 周年っていう節目もあって、比較教育学の可能性について今日沢山議論したので、次にどんな展開を見たいと思うか、一人ずつ話して終わりにしましょうか？

森下： 今回出版した本は、いろんなキーワードが浮かんでくる本だったと思います。この科研では、私は自分が地域研究者なのだとしたらどうなのかということ振る舞ってみたわけ。「地域研究者」という立場に自分の身を置いて、それで一生懸命発言したら、実は東大が自分の言ってることやってることのルーツになっているっていうのを発見しました。だから、学生の時に何となく感じていた「反東大」という、染みついていたものがスッと抜けたっていう…。

山田： 自由になったわけですね(笑)。自由になって次は、ご自分の研究としてはどんな方向を目指していらっしゃるんですか？

森下： 自分の研究としては、やっぱり、これからもずっと、皆と一緒にやるっていうことだと思うんですね。この本のあとがきにも書きましたが、稲葉継雄先生が「よってたかって比較教育学」とおっしゃったのを引用しましたが、比較教育ってどうやる学問なのかって聞かれば、よってたかってやる学問なんですっていう風に答えられる。「～とは何か」って聞かされると答えにくいけど、「どうやってやるか」って聞かれたら、皆でよってたかるんですよっていうように言えるなっていうのが、この本を通じて思うようになったことです。

山田： ぜひよろしくをお願いします。これからも。

服部： 私も森下さんに賛同する部分があつて、比較教育学って何なのか、何を比較するのかと言われたときに、森下さんが言っておられた、各国のスペシャリストが集まって比較研究をするのだというのが、今、私の中では合点がいています。まずは自分のスペシャリティを極めることが最も大切ですが、さらに他の人と一緒に研究を進めることも大切で、その意味で比較の方法論の一つとして、やはり、皆と一緒に研究を進めることが肝要かと思います。次に、社会的に還元するかしないかという点に関しては、私自身は、一つの論文の中で即効的に還元するという風にはあまり考えていません。自分のスタンスとしては、論文は論文として、政策提言的なことはあまり書きたくないと思っています。でも、相手国あるいはそこで暮らしている人々と関わる中で、別の形での社会的な還元ができると考えています。人的な

交流を中心とする国際交流、たとえば留学生を受け入れたりといったことも社会的な還元
のなかに含まれると思います。また、政策志向的なプロジェクトに入った時には、学術的な
成果を踏まえた上で政策提言的なことを言うように努力するとか。そのように、一人の中で
いくつかの役割を果たせるようになることが大切だと思っていることと、さきほど杉村先生が
言われてたように、やはり比較教育研究者が集まるから面白いことができる、そういう領域
があると思っています。トランスナショナルな領域というのはそういう意味で重要だと思いま
す。そのほかにも、4つか5つ、そういう領域を思いつけないでしょうか。比較教育学者とし
て多くの国や地域を俯瞰できる力と、同時に、マイクロへの視点を常に持ち続ける力というの
か、それを繋げるような形での研究スタイルができるといいですね。そういうテーマがあると
とても魅力的だと思っているところです。

山田： ありがとうございます。山内先生いかがですか？

山内： 私は比較教育学のプロパーではないので、私の立場から比較教育学者っていうのを見ると、視野の広い人というか、相対化した視点を持つ人というイメージが非常に強いんですね。私が本務校の学生に海外の教育について話すと、日本のような教育がどの国でも一特に先進国では一あると思っている学生が非常に多いことに驚かされます。そういう学生に対して、視野を広く持つとか、相対化する視点を持つとか、そういうことができるようにする点が比較教育学の持っている大事な特性だと思います。さっき杉村先生がおっしゃった、「国民国家を前提にした比較教育学から変わるのだ」という話と関係あると思いますが、そういう相対的な視点というのは、比較教育学か、教育の歴史的な研究か、どちらかかによってしか、なかなか得られないものだと思いますね。比較と歴史というのは、どちらも研究方法論であって、研究対象ではないのですけれども、しかし非常に重要な領域で、これからも発展していった欲しいと思います・・・という、外野からいつているみたいで無責任な感じがしますが・・・。

山田： 一つお伺いして良いですか？先ほどから自分は比較教育のプロパーでは無いとおっしゃっているんですが、比較教育のプロパーだと思うか思わないかって、非常に主観的なものじゃないかなと思うんですよね、領域自体が漠然としているので。プロパーじゃないという自覚はどこから？やはりトレーニングをそういう風に受けて無いということですか？

山内： 全く、授業とか受けた訳ではないんです。おそらく、例えば、名古屋大学だったら天野先生や馬越先生、西野先生、服部先生が比較教育学という授業をお持ちで、「比較教育学概論」みたいな授業をされたと思いますね。けれども、私の場合、そういう授業は全くなくて、各授業の中で海外の教育制度と比較した話を個別的、断片的に聞いたことがあるという程度です。比較教育学に関心はあるけれども、学問としての比較教育学とはなかなか接する機会がなかった、比較教育学固有の理論についてほとんど知らないという人間が私の周りに非常に多いですね。

山田： プロパーじゃない人、実は多いですよ。何をプロパーと呼ぶかなんですよ。

山内： ただね、そうはいつでも教育社会学プロパーという人はいますよ。ちゃんと理論的なことを教科書で学んで、実験や実習等で方法論や分析手法を体系的に学んでいます。だから、プロパーの定義も難しいと言えれば難しいですけども、それはともかくとして、とにかく私自身としては、自分はかなり外にいる人間だろうなという自覚がありますね。

山田： ありがとうございます。じゃあ杉村先生いかがですか？

杉村：今日の先生方のお話を聞きながら、やはり今日のような場が必要なのだということをつくづく感じました。皆で一緒に考える大事さというものについては、森下先生も、服部先生も、山内先生もおっしゃってくださいましたが、やはり一人で考えていると一つのところしか見えないけれど、皆で議論することで、多様な見方が見えるし、同時に、また本日最初にでた話に戻ってしまいますが、敢えて「比較教育学ってこういう学問だ」という型にはめないようにすることが、この比較教育学会のおもしろさを醸し出している部分ではないかと思います。つまり、理論化をして型にはめたら、見ようと思っていたものが見えなくなったり、あるいは見落としたりするかもしれない。だからわざと結論を出さないということが大切なのかもしれませんね。比較教育学は非常に多義的で、多層的な分野ですが、それを皆がその都度、その都度、ワイワイガヤガヤ、さっきおっしゃった「よってたかって」でしたか？まさにそうした協働作業が、比較教育学の面白さではないかという気がします。日々更新して作っていく、そういう学問であって良いのではないかという気がしました。

<今後の研究アイデア>

杉村：もう一つは、これから何について関わっていかうかという際に、個人的にはトランスナショナルというテーマにぜひ挑戦したいと考えています。その場合、服部さんがおっしゃったマクロ、ミクロを繋ぐという話と同時に、時空間を越えて比較するというのがあるのではないかと思います。トランスナショナルという視点は、例えばアジアにおける教育の地域連携といった話のときに話題になります。例えば今日の国際理解教育はとりあげているような考え方や実践は、戦前の日本にもあり、そうした時代を超えた比較を、教育史や国際教育交流史のような観点から行うことも、比較教育が挑戦したらいい分野なのではないかと思います。これは他の分野ではできないものではないでしょうか。そして過去から学ぶ。そういう意味では、歴史は、どんな分野でも一開発研究でも、人類学でも一考慮されるべき視点だと思いますし、歴史性を重視するというのも、比較教育の特性といえるのではないかと思います。もちろんコンテキストは時代によって違いますけれど、あの時はこうだったけど、今回はこうだといった意味で比較できたら面白いと思います。

山田：おもしろいと思いますね。変わらないものもありますね。

杉村：そんな研究アイデアの交換の場があったらいいですね。今日こうやって議論できたことで、こうしたアイデアも生まれてきましたし。こうした議論をもっと学会としてやれたら楽しいですね。でも、現実的には、比較教育学会は千人規模の学会になっていますので、皆でワイワイガヤガヤと言っても難しいですけどね。

山田：全員は無理ですけど、考えを共有する人たちで始められるといいですね。

司会の身で最後にしゃべって恐縮ですが、私も、今日すごいお話して刺激を受けた部分がたくさんあります。「開発研究」という立場からしゃべる人間として、今後やってみたいことを、今の話の流れで申し上げると、開発とか援助の世界が今すごく変わりつつあるんですよ。つまり、先進国が途上国に援助するという垂直的關係として、援助するという発想、欧米の理論付けの仕方、実践も行われて来たというのが、戦後の援助の歴史だったと思うんです。しかし、今援助すると言うことが、欧米先進国独占の事業ではなくなってきている。つまり、欧米は弱体化してきて、それこそ、先進国グループに入っている、スペインだのポルトガルだのが実は途上国より貧しいといったことがある訳ですし、人に援助できる余裕が無い国がどんどん出てきている。一方で、インド、中国、ブラジル、南アフリカといった国が、援助する側に回ってくるという風になったときに、論理構成の仕方が違う人たちがたまたま援助の実践をしているという風に状況が変わってくるんですよ。そうすると、援助するって

いうことを既存の枠組みで説明しようとしているとわからなくなってくることもあるんです。で、援助というものを捉える理論をもう一回脱構築しなきゃいけないと思う時に、やろうとすることは、今日のお話で皆さんがおっしゃっていたトランスナショナルの発想にも繋がってくる気がします。要は、ある国なり社会が、どういう論理を持っているか、どういう発想を持つか、何に思想的根拠を持って援助したり教育に関わるかっていうことを、辿るとそれは歴史であるし、社会のものの捉え方になってくるんです。で、欧米とは違うものっていうのは何で構成されているかって考えると、最近、私、アフリカ研究者であったはずがアジア的なものの考え方にすごい興味が湧いているんです。アジアの人づくりの発想って、援助業界の「教育セクター」の枠組みには合わないところがあって、それが最近のパラダイム変化を象徴的に特徴づけている気がするんです。そういうのを、もう一回、マイクロから、歴史から、文化から見る、それである社会の教育観、援助観っていうのをもう一度考え直すことが必要だろうなって思うようになってきました。ビックプロジェクトなんですけど、最近はそんなことを思っています。それもきっと、おっしゃっていたようなトランスナショナルとか、比較教育学ができることっていうのに繋がって行くかななんて妄想しながら、お話を聞いていました。

服部： 先ほど無責任に4つか5つテーマがあると面白いと言って、今、皆さんにアイデアを出してもらったので、私の考えも少し述べようと思います。今までの比較教育学研究は、フォーマルな学校教育の研究に少し偏りすぎているように感じています。そのため、もう少し社会の文脈のなかでの子どもの社会化の側面や、ある社会がもつ人間観・社会観といった側面、広い意味での子育てとか産育といったものを通して、より広く教育を捉えなおすことができるのではないかと考えます。そしてそれは、地域に深く入り込んでいる比較教育学者だからこそできる仕事だと思っています。さらに、それをトランスナショナルな視点や国際的な視点で見るととても面白いと感じます。

杉村： そうですよ。そのようなトピックを出し合えるような場になるといいですね。先ほど、トランスナショナルとか時代の観点をふまえた比較の大切さを述べましたが、服部先生がおっしゃった、ソーシャライゼーションは可能性があるテーマですね。その他にも、たとえば黒田一雄先生のグループが取り組んでおられるインクルーシブ教育も、興味深いテーマです。教育学の根本の議論が求められる分野ですよ。そこには開発研究も地域研究も関わります。こうしたトピックをいくつか整理して試してみるのもいいかもしれないですね。学会でも、こうした課題を皆で整理して、課題研究で取り上げるとか、有機的に議論できると面白いでしょうね。

服部： それと繋げて、教育思想的な側面も面白いと思います。今までは西洋の教育思想が主流を占めていて、大学の教職課程では皆ペスタロッチやルソーといった西洋の教育思想を一通り学習するという慣例になっていますね。でももっと、教育に対する多様な考え方が世界にはありますし、何よりも比較教育学者はそこへのアクセスをもっています。多様な教育思想・人間思想を掘り起こして、比較の観点からその思想を皆で議論するのもよいと思います。

山田： それ面白いですよ。インドの教育思想家とか、アフリカの教育思想家とか。

服部： そういった多様な教育思想や思想家をもっともっと開拓してゆくことで、なぜその地域でそのような思想が生まれたのかという社会研究にもなりますし、教育学研究にもなると思います。そんなふうの世界を相対化してゆくことが大切なのではないかと考えています。

杉村： そういう研究の切り方をすると、皆が自然にいろんな角度から取り組んでみることができますね。そういうテーマを探し当てることも、比較教育学の役目かもしれませんね。

山田： その思想の紹介の勉強会とかすぐにでもやりたいくらいですね。

(了)